

# スロータウンのまちづくりをめざして

愛媛県三瓶町 町長

井伊 敏郎



## 1. 町の概要

三瓶町は、佐田岬半島の付け根に位置しており、九州を挟む宇和海に面した人口約9千人の入り江の町である。

町域は、東西8km、南北11km、海岸線23km、面積41km<sup>2</sup>で、西に宇和海が広がり、北は八幡浜市、東は宇和町、南は明浜町と接している。平地は少なく背後にはすぐ山が迫っており、平均傾斜30度の斜面に段々畑が拓けている。

海岸は典型的なリアス式海岸で、湾内は変化に富み良好な海洋性景観を有しており、佐田岬宇和海県立自然公園の一角を占めている。気候は非常に温暖で、年間平均気温は17度前後。やや瀬戸内海気候の支配を受け、降雪、降霜ともきわめて少ない。

平地の少ないわが町は、歴代庄屋による海の埋立てにより発展してきた。海上交通が主力だった昭和初期には大手紡績工場を誘致し、最盛期には南予各地から約2千人の労働者を受け入れていた。昭和30年代頃までは、漁業、海運業なども活況を呈し、町はおおいにぎわっていた。民家や路地などにそのなごりが残されている。

農地面積は農家人口の減少で460haと少ない。かつては山頂部まで築いた段々畑での甘藷栽培と、わずかな平坦部での米麦栽培が主であったが、昭和30年代以降

は、温州みかん、伊予柑、清見、日向夏等のかんきつ栽培に移っている。

その中でもニューサマーオレンジ(日向夏)は、全国の生産量の20%を占める特産銘柄産地となっている。

水産業は、宇和海域を漁場とする漁船漁業と三瓶湾内の養殖漁業があり、養殖のハマチ、ヒラメについては県内有数の生産量を誇っている。

しかし、長引く不況の影響により、農産魚産物の価格は低迷を続け、みかんとさかなが主産業の当町の経済はきびしい状況が続いている。

昭和30年の昭和の大合併当時には、1万7千人をこえていた人口も減少の一途をたどり、ピーク時の約半分となっている。それとは反対に高齢化率は年々上昇して約32パーセントであり、少子化とあいまって典型的な過疎の町である。

町財政は、自主財源に乏しく地方交付税に頼らざるを得ないが、昨今の地方交付税見直しの流れを受け、行財政改革による経費削減でもとても追いつかない厳しい状況となっている。

## 2. 住民との対話

そのような三瓶町において私が町長に就任したのが平成8年9月。バブル経済がはじけ、失われた10年といわれる1990年代の真只中にあり、上記のよう

なきびしい状況の上に激しい政争にもさらされ、町民の間には行政に対する期待感はどうすれ、進んで協力をしようという機運も失われていたような中でのスタートだった。

そこで私がまず取り組んだのが、町民と直接対話をしてまちづくりへの協力と参加をよびかけることだった。自らの体験からみても一般の町民が町長や役場職員と話ができる機会のはめつたにない。そこで課長会にその提案をしたところ、かつて一度だけ地区懇談会を実施したことがあったが、地区や個人から陳情や要求が吹きでて、大変な結果になってとりやめたことがトラウマとなって、多くの課長は私の提案に反対した。しかし「まちづくり懇談会と銘打ち、三瓶をいい町にするための意見交換の会にすれば、かつてのような失敗はしないだろうから、とにかくやってみよう」と、反対を押し切るように19地区ある町内のすべてを訪問し地域住民との懇談会を実行した。

新しい町長が何をやるのだろうかという目新しさもあり、町民の関心は高く予想以上の参加者を得ることができた。住民からは多くの建設的な意見や具体的な提案がだされ、行政側にとっては町のきびしい現状を直に訴えるよい機会となり、課長たちの心配は杞憂に終わった。

行政への理解を深め信頼を得るためには、住民のなかへ失敗をおそれず勇気を持って飛び込んでいき、誠意を持って話し合うことが大切だということを、私自身はもちろん町の職員も学習した貴重な一歩であった。三瓶町にゆかりの深い国民詩人・坂村真民さんの詩に「念ずれば花ひらく」という有名な言葉があるが、それまでもつれた糸のようになっていた長年の懸案事項も、解決をするという強い信念と誠意をもって住民と直接対話していくことによって、つぎつぎと“花がさいていった”ように思う。

ちなみに坂村真民さんは、熊本から四国に渡ってきて最初に教師として赴任したのが、三瓶高校の前身の第二山下高等女学校なのである。その間には「ひびきよき三瓶のまちの人となり 波しづかなる海を見おろす」「こほろぎはすでに生まれてひるも鳴く ま夏とい

へど涼し三瓶は」などの短歌や三瓶高校の校歌など数々の作品を残されている。

### 3. 伝統文化等の保存・継承

三瓶町はまちのキャッチフレーズとして「太陽と海につつまれた生活と文化のまち」とうたっているように、文化面でも特色のあるものが多い。

藩政時代の苦しい生活のなかにあつて、町の人々は日々の暮らしの中に憩いと笑いを求めていたようだが、それらは愛媛県の有形無形文化財にも指定されている人形浄瑠璃「朝日文楽」に受け継がれている。

朝日文楽の起源は、明治初年、朝立地区で井上伊助が木のこぶや桐の木で人形の頭を刻み、胴や衣装を付けて公開したのが始まりと言われている。朝日座で上演されていたため「朝日文楽」と命名された。

昭和36年には、住民有志により朝日文楽保存会が設立されるとともに、昭和39年には三瓶高校に「朝日文楽研究会」を、平成6年からは、小中学生を対象に「子供朝日文楽クラブ」を設立し伝承につとめている。

卓越した芸を教えてくれる大人たちとの交流を通して、子供たちが町の誇りと気質を受け継いでくれることは喜ばしいことであり、これからも絶やすことがあってはならない。

郷土の祭りの中では、朝立国造神社に伝わる「秋祭り」と「おねり」がある。毎年10月15日、朝立揚・浜地区では、各家で親戚や知人を招き秋の収穫を祝う行事が続いている。

かつて三瓶町は伊達宇和島藩の領地であり、南予の各地と同じように伊達藩の流れを汲む芸能が伝わり、地域性が加わって独自の祭りとなっている。

「おねり」は、揚地区の牛鬼2頭を先頭に、金幣、みこし、奴さん、稚児、子供甚句、唐獅子、五ツ鹿と続き、最後尾に浜地区の四ツ太鼓2台が威勢よく進んでいく。その列は200mにも及び大行列をしのばせる。

途中、一軒一軒の玄関に牛鬼が頭をのぞかせて悪魔払いが行われ、祭りの最後には牛鬼と四ツ太鼓の鉢合わせも行われ多くの見物人を楽しませている。

安政5年(1858年)に蔓延した悪病(コレラ)の退散を

祈願して始まったとされる郷土色豊かな祭りが今も脈々と受け継がれてきている。

また一方で、新しい文化を育む取り組みも地元ライオンズの主導によって行われてきている。わが町出身で、サトーハチローさんの愛弟子、童謡詩人・宮中雲子さんの協力をえて、にほんのうた全国合唱コンクール「宮中雲子音楽祭」を毎年開催し、今年で6回をかぞえている。「全国」という大きな看板を掲げて大丈夫だろうかと心配したが、当初こそ参加団体の確保に苦労したものの、今では県内各地はもとより香川県や九州からも参加があり、文字通りの音楽祭に育ってきている。「文化でめしは食えん」と云われながらも継続してきたおかげで、ここでも町の人たちによる手作りの新しい文化が花さいてきたといえる。

#### 4. 町民の活動状況

本町には都市には見られない海山の自然も多く残されている。これらのすばらしい自然や文化を生かし守るために町内各地区やグループによる活性化の取り組みもさかんに行われている。

まず、当町唯一の水田地域の蔵貫集落で、農道・水路・ため池などの清掃美化活動から始まり、「ほたるの里」「めだかの学校」「アジサイロード」「かんなの道」などを自前でつぎつぎと建設して環境保全に努めている「太陽会」と「めだか会」は、町内のボランティアグループの草分け的存在である。

「元祖豚のロデオ」で全国に情報発信を行い、今年



豚のロデオ

で21回目を迎えた町の夏祭り「奥地の海のかーにばる」を企画・立案・運営する農林漁業・商工業後継者の「イベント実行委員会」や、町の中心部にイルミネーション

ツリーを県内でもいち早く設置し、冬の風物詩として見物客を集めている町内若手経営者のグループ「三瓶経済文化研究会」(MEC) などがある。

女性の活動としては、伝統的な郷土料理を手作りで

共同生産して販売を行い、町の行事にはいつも協力を願っている元気なおばちゃんたちのグループ「かめさん」はじめ、町内産物の販売を行うピンピン市を主催する「生活改善グループ」、ゴミの減量や水質改善など町の環境問題を考え、幅広い活動を行っている「みかめ女性塾」など多彩である。

「まちづくりは人づくり」「町の活性化は地域から」との観点に立ち、さらなる民間活動の推進を図るため、平成11年度に人材育成支援制度を、平成13年度には自主的な地域のコミュニティ活動やボランティア活動を活性化させるための「コミュニティ活動支援制度」などを制定した。これによってハードな活動だけでなく、精神保健ボランティアなどのユニークな活動も生まれてきており、直接・間接的に行政を支援してもらうグループの輪が広がりを見せているのは、合併を控えてたいへん心強く感じている。

#### 5. 農村アメニティコンクール最優秀賞

国土庁、現在は省庁再編により農林水産省が主催している農村アメニティコンクールというものがある。これは、重要な居住空間としての役割や都市住民を含めた国民のふるさとの場としての機能を期待されている農山漁村のなかで、特有の緑や豊かな自然環境、景観、歴史、風土などを基盤として、ゆとりと潤いとやすらぎにみちた居住快適性の確保に配慮した農漁村を顕彰するものである。

平成11年度のコンクールにおいて、先般、内子町でおこなわれたえひめ町並博のシンポジウムで講演された木村尚三郎東大名誉教授やパネラーを務められた女優の浜美枝さんが、その審査員として来町され、わが町の自然環境や文化伝承、町民の活動を絶賛していただいた。最終審査の結果、「梅栗うえてハワイにいこう」であまりにも有名な大分県大山町や世界遺産の合掌造りがある富山県平村、岩手県陸前高田市、鳥取県関金町等、名だたる市町村をしりぞけて、ほとんど無名のわが三瓶町が最優秀賞を受賞した。

その講評文にはこう書かれている。「女性の活動にみられるような開かれた文化風土、子どもに対する地域

教育力の高さ、そして農林漁業がしっかりしていることに深い感銘を覚えました。貴町の豊かな自然と住民の生き生きとした活動に接し得たことを感謝するとともに、今後は自然環境や景観に配慮され、より一層アメニティの向上が図られることを期待しております」

このような高い評価を得られたのは、上記に掲げてきた歴史や文化、自然環境など三瓶町の先人たちが築き上げ、残してくれた地域資源があらためて評価をされたものであり、先人に感謝するとともに、いま三瓶町に住む町民の気質や活動を評価してもらったものもあり、三瓶町民にとっても大きな誇りとなった。そして活動グループにとっては何にも優る褒美となり、その最優秀賞が現在も活動の拠りどころとなっている。

## 6. スロータウンの取り組み

いま日本各地でかつては考えられなかったような事件や犯罪が毎日のように新聞やテレビをにぎわしている。日本の国はどうなってしまったのだろうかと思嘆くことばかりである。これは日本の戦後社会がアメリカ型社会を見習い、スピードと効率、利便性を優先して追い求め、世界有数の物質的な豊かな国に発展したものの、こころの潤いや豊かさを失いつつある結果のようにみえてならない。

アメニティという言葉にはこころの潤いという意味も含まれているのだと思う。そのアメニティ日本一という、わが町にとって初めての快挙ともいえる大きな榮譽を戴き、少し戸惑いながらもさらにそれを生かすまちづくりを進めていくための方法を模索しているときに、「スロータウン」への参加のよびかけを受けた。日本青年館のセミナーで毎年一緒に勉強会をおこなっている新旭町の海東町長からのよびかけであり、事務局として世界の三井物産の戦略研究所が担当されるという。

イタリアのローマにマクドナルドが進出したことにより、ヨーロッパの伝統的な食習慣や伝統料理が脅かされる危機感からはじまったスローフード運動が世界的な広がりを見せてきている。スローフード運動のまちづくり版がスロータウン構想だ、と名付

け親で仕掛け人でもある戦略研究所の園田さんの説明は明快だった。

スロータウンということばの響きのよさに惹かれたのと、町の大きなネットワークを期待できると思い、快く参加を約束させてもらった。

海東町長や園田さんの呼びかけでスロータウン連盟設立準備会に全国から13人の市町村長が三井物産本社に集合した。

北海道東藻琴村・小島村長、青森県南部町・二本木町長、茨城県東海村・村上村長、新潟県相川町・弾正町長、三重県名張市・亀井市長、滋賀県新旭町・海東町長、京都府宇治山田町・奥田町長、和歌山県本宮町・泉町長、鳥取県智頭町・寺谷町長、愛媛県三瓶町・井伊、高知県池川町・三浦町長、佐賀県相知町・大草町長、長崎県森山町・田中町長である。

全国の名だたる市町村や首長に交じって、スロータウンの基本理念や活動方針の検討をおこない以下のように決定をみた。

### □スロータウン基本理念

戦後の日本は、欧米諸国に追いつき追い越すことを目標として、政治・経済の中央集権システムにより経済大国へと猛烈なスピードで突き進んできた。しかし、21世紀を迎えた今、このような戦後50年の価値観を見直す必要がある。

日本社会の将来の姿としては、2つの社会(社会システム)が共存する社会の構築が望ましい。一つは「スピード社会」であり、もう一つは「スロー社会」である。

前者は、時計に刻まれる世界共通の時間軸の下、効率、利便性を重視し、新しいものを追及する社会である。後者は、自然のリズムなど多様な時間軸を認め、万事手間隙をかけて物事を深く追求し、“保存・再生”に重点を置く社会と考えられる。

これら2つの社会がお互いを認め合い、尊重し合い、競い合いながら共存する社会を目指すのである。また、どちらの社会も“善”であるという認識を持つことが重要である。

このうち、まちづくりにおいて「スロー社会」を自らの新たな社会システムとして目指していこうとする市町村および「スピード社会」と「スロー社会」とが共存する社会システムを目指していこうとする市町村を『スロータウン』と呼ぶ。『スロータウン』においては、原点である地域資源・天然資源を見つめ直し、手間隙を惜しまず、“保存・再生は革命”という強い意志をもって、国民一人一人の真に“よりよい人生”の実現へとつながるまちづくりに取り組んでいく。

#### □活動目標

- 理念に基づいた社会の実現と日本再生
- 真に“より良い人生”の実現
- 宣言文の世界への発信

#### □保存・再生活動

- ① 地産地消
- ② 農家リフォーム
- ③ 郷土文化、郷土芸能、郷土工芸品、郷土料理のリニューアル
- ④ 里山、里川、里海、ふるさとの心の保存・再生
- ⑤ 自然エネルギーの再生
- ⑥ 近所同士の助け合い
- ⑦ 個人の資質向上(一人一芸、一人一資格、一人一NPO活動)
- ⑧ 将来伸びる教育・訓練
- ⑨ お年寄りの知恵を借りる
- ⑩ 五感の再生
- ⑪ 子だくさん(1+1=3)

まさに私がこれから目指そうとしていたことが、すべてうまく表現され取り入れられている。準備会に立ち会い内容を共に協議することによって、この趣旨に沿ってまちづくりをおこなうことが、必ず将来の三瓶町のためになるとの確信を得た。

設立準備会の協議を経て、趣旨に賛同する全国51市町村の参加で、平成14年11月1日に「スロータウン連盟」が設立された。

このスロータウンの趣旨にそって、わが町のよさを

見直す事業の第1弾となったのが、今年4月のフランス画家招聘事業である。

パリに住むわが町出身の中村ちえりさんの紹介により、フランスで活躍中の著名な女流画家2人(ダニエル・フッシュさんとニコル・マルクさん)を招聘し、三瓶の風景を題材に絵を描いてもらうというものだ。

ポイントさがしに町内をまわりながら、彼女たちは三瓶町の海や段々畑の景色を「地中海の保養地コートダジュールにも匹敵するぐらいトレピアン」とほめた。また、2週間の滞在期間に食した三瓶の料理を「セボン、トレボン」と絶賛した。最後に「事前に送られた資料で想像していたよりもはるかにすばらしい町だった。もう少しPRをうまくやりなさい」とのアドバイスももらった。

リップサービスがあるにせよ、芸術の国フランスの彼女たちから景色と食を賞賛されたことは大きな自信となった。「また三瓶にいきたい」と中村さんにいまでも連絡が入るといふ。

その第2弾は、11月に実施した食の文化祭だ。



食の文化祭



郷土料理展示コーナー

“地産地消”と“郷土の豊かな食の再発見”を目的として、農協・漁協・商工会や多くの女性団体の協力によって、特産の豚肉をメインにすべて地元の食材を使った大釜(地元の造り酒屋さん提供)の豚汁を味わってもらおう。また、昔ながらの郷土料理やおやつをつくり、手間ひまかけてつくったスローフードの味わいを

楽しんでもらおうというもの。当日は北海道東藻琴村はじめ全国のスロータウン連盟の町村からの特産品協力もあり、大勢の町民が押し寄せ大盛況であった。

また、日頃はファーストフードやスナック菓子を食べ慣れている高校生や小学生の自主的な協力参加もあ

り、地元の食材の豊富さを再認識し、身近な食を通して地域の生活の豊かさやスローフードの良さを見直す絶好の機会となった。

第3弾、第4弾・・・と保存・再生活動を続けて取り組むことによって、スロータウンの目指すスロー社会の実現につながっていく。しかしそれは一朝一夕でできるものではなく、まさにゆっくり手間隙かけて根気強く続けていくことが大事である。それによって継続は力となり革命が起こると信じている。

ただ、スロータウンだからと地域のサービスまでスローであってはならないのは言うまでもない。役場職員はあくまでもビジョに仕事をして、地域住民や来町者にスローライフを楽しんでもらうという気持ちを決して忘れてはならない。

## 7. おわりに

三瓶町は、来年(平成16年)4月1日には東宇和4町(明浜町・宇和町・野村町・城川町)と合併して「西予市」としてスタートすることになる。西予市となっても、わが町のスロータウンとして目指している方向性に誤りはないと信じている。今後ともスロータウンへの歩みを弱めることなく“おらがまち”の独自性を発揮していきたいものである。

また、5町が調和を図りながら1つの町としてまとまっていくことも重要なことだ。それぞれの町がもつ特色を研きあいながら、バラエティに富んだ、しかもバランスのとれた魅力あふれる「スロータウン西予市」になっていくことを願ってやまない。

あとがき

当町職員の三好誠子がえひめ地域政策研究センターに、昨年までの2年間お世話になっており、原稿の依頼をことわりきれずに安請け合いましたものの、あっちこちから資料を引っ張り出したり担当職員に何度も確認したり、辞書とはにらめっこと悪戦苦闘の毎日でした。締切日が近づいても与えられた文字数はなかなか埋まりきらず、自らの浅学さ蓄積の少なさを痛感させられた次第です。

しかし、「そのことを自覚できただけでもありがたかったのかな」「少しは三瓶町のPRができるのかも」と自分自身にいきかせています。このような機会を与えていただいたえひめ地域政策研究センターさんに感謝しながら、やっとパソコンを閉じることができます。

平成15年12月14日

## Profile 井伊 敏郎

1952年愛媛県三瓶町生まれ。

早稲田大学法学部卒。

1996年町長就任。

民間企業の経営経験を生かし、経営感覚の導入と住民サイドに立つ行政を目指す。

合併も住民意思を尊重し、郡域を超えて東宇和との合併を選択する。